

義父と嫁

第二卷

清楚な嫁の大胆過ぎるヌード写真集

海老沢 薫 著

## 内容

■ 著作権について

■ まえがき

■ 第一章 生殺しにされた嫁

■ 第二章 庭で嫁のヌード撮影

■ 海老沢薫 B L O G

■ 海老沢薫 W e b 連載小説

※ 海老沢薫 B L O G

・ ・ ・ 最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

<https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/>

■ 著作権について

「義父と嫁 第二巻 清楚な嫁の大胆過ぎる  
ヌード写真集」（以下本書と表記する）の著  
作権は「海老沢薫」にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、  
及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可し  
た場合を除き、本書の一部、または全部を、  
あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファ  
イル、ビデオ、テープレコーダー）により複  
製、流用、転載、転売することを固く禁じま  
す。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第  
61条などの罰則がありますのでご注意ください  
い。

■ まえがき

エアコン修理にやって来た業者の男達の前で屈辱的な姿を晒し、羞恥に喘ぐ嫁の環奈。男達にその熟れた体を悪戯された若妻は、義父の勇蔵と義姉の美奈子が部屋に戻って来た事によって最悪の事態だけは逃れることができたが、勇蔵から衝撃の命令を与えられる。リビングのテーブルの上に座ったまま恥辱のショーを演じることになった環奈は、目の前にいる義父の顔を見つめながら自らの手で体を慰め始めた。

「ああん、ああん」

リビングに環奈の恥ずかしい喘ぎ声が響き渡ると、義父や義姉、さらに業者の男達は若妻の恥辱ショーに釘付けとなった。

「環奈、いつ、イキまゝす！」

やがて、清楚な嫁は断末魔の叫び声を上げながら絶頂を果たし、テーブルの上でグッタリと項垂れるのだった。

それから環奈が快感から目を覚まし、業者の男達が帰ると、美奈子は環奈の耳元で新たな屈辱の命令を囁きかける。  
「お父さん、今度は庭に出て・・・私のヌ、ヌード写真を撮っていただけませんか？」  
勇蔵に向かって無理矢理屈辱のセリフを吐かされた環奈は、羞恥に体を震わせながら一糸纏わぬ姿で庭へ出ることになり・・・。  
欲情を煽られた勇蔵は趣味のカメラを構え、と、環奈に対して次々と屈辱の要求を突きつけた。  
「まずはさつきと同じガニ股になつて、両手を頭の後ろで組むんだ」  
「そんな怖い顔していないで、ちゃんと笑うんだ」  
「もっと心から笑うんだ！」  
やがて、勇蔵は環奈を一糸纏わぬ姿のまま庭にある物干し竿に縛り付けると、その痴態を四方八方から撮影した。

あぁん、もう許してください・・・心の中  
で必死に許しを乞う環奈に、傍で撮影の  
子を見守っていた美奈子は、突然ホースで  
水を掛け始める。  
「環奈さん、アソコに水を掛けられて随分  
持ち良さそうじゃないへ笑」  
美奈子がそう嘲笑うように、秘部に水を浴  
びせ掛けられた環奈は物干し竿に緊縛され  
たま悶え狂い、その姿を勇蔵に撮影され  
た。そうして、庭先で若妻の恥辱の撮影  
会は続  
き、哀れな美しき嫁は物干し竿に縛られ  
たま  
絶頂を迎えるのだった。

■ 第一章 生殺しにされた嫁

リビングのテーブルの上で全裸ガニ股ポーズをする環奈は、エアコンの修理にやって来た業者の男達に剥き出しの秘部を弄られ喘いでいた。

「あぁん、もうダメえ」

環奈はガニ股のまま腰を前後に厭らしく振り乱し、愈々絶頂を迎えようとしていた。

「姉ちゃん、良い声出してイクんだぜ（笑）」

業者の男はそう不敵に微笑みかけると、一気にラストスパートをかけるように指のピストン運動に力を込めた。

「あぁん、いやぁぁっ」

環奈の断末魔の叫び声がリビングに響き渡り、清楚な嫁が見知らぬ男達の手によつて陥落する瞬間が今まさに訪れようとしていた。

するとその時、リビングの扉の隙間から部屋

屋の中の様子を窺っていた義父の勇蔵と義姉

の美奈子が突然部屋の中心に戻ってきたのだっ  
た。  
「ああっ」  
環奈の秘部を弄っていた男達は驚きの声を漏  
らし、慌てて環奈の体から手を離した。  
「ちよつとアナタ達、何やってるんですか！  
美奈子は男達に向かって声を荒げた。  
元々、環奈を全裸ガニ股ポーズのまま男達  
の前に放置した首謀者は美奈子であつたが、  
環奈を男達の手で簡単にイカせたくはなかつ  
たのだ。  
「す、すいません」  
業者の男達は酷く慌てた様子で、美奈子達に  
頭を下げて謝つた。幾ら目の前に卑猥な体つ  
きをした全裸ガニ股ポーズの美女がいたから  
とはいえ、その体に手を伸ばし秘部を弄る事  
は一種の強姦であり、警察に通報されてもお  
かしくない行為だつた。

「まあいいわ。この人は露出狂のド変態だから喜んでいたみたいだし、何も見なかった事にするわ」

美奈子は、環奈の厭らしい汁でびっしよりと濡れたティブルを見ると、男達にそう告げた。業者の男達は美奈子の言葉に少しホッとした様子でもう一度深々と頭を下げた。

そして、業者の男達が再び作業を始める傍で、環奈は全裸ガニ股ポーズのまま勇蔵と美奈子の方を恨めしそうな目で見つめていた。どうして、あのまま私をイカせてくれなかったの・・・。環奈は無意識の内に心の中でそう二人に訴えかけ、その切なそうな表情を見た勇蔵と美奈子は意味深な笑みを浮かべた。

清楚な嫁のスケベな本性を垣間見た勇蔵は環奈がガニ股の体勢で秘部からポタポタと厭らしい汁を垂らす様子をデッサンした。

「環奈さん、知らない男の人達に体を触られ  
たくらいでそんなに濡らすなんて、アナタっ  
て本当にド変態ね」  
美奈子は呆れた様子で吐き捨てた。  
確かに、業者の男達に秘部を弄られて恥ず  
かしいほど濡らしてしまった姿を、もし單身  
赴任中の夫に見られたらと思うと、環奈は自  
分自身が情けなく惨めに思えて仕方なかつた。  
アナタごめんなさい・・・。環奈は心の中で  
夫に何度も謝りながら、体の奥から溢れ出す  
欲情を必死に鎮めようとした。  
しかし、久しぶりに男性の手によつて弄ら  
れた体はすっかり火が付いてしまったのか、  
溢れる欲情を環奈は簡単に抑えることができ  
なかつた。ああん、私どうすればいいの・・・  
・このままだとおかしくなりそうだわ。テー  
ブルの上でガニ股ポーズを披露する環奈は、  
剥き出しの秘部がどうしようもなく疼き、身  
悶えた。  
「じつとするんだ！」

デッサンをしている勇蔵は、小刻みに体を震  
わせる環奈を叱責した。  
「ああん、ごめんなさい・・・」  
義父の逆鱗に触れた環奈は必死に体の震えを  
抑えようとしたが、秘部からはまるで義父を  
挑発するかのよう to 厭らしい汁が止めどなく  
滴り落ちた。  
「まったくしょうがないな」  
勇蔵は呆れ返ったようにそう吐き捨てると、  
目の前で身悶える嫁に恐るべき命令を下した  
のだった。  
「そんなに人に裸を見られて興奮しているな  
ら、そこでオニーしなさい」  
勇蔵がそう告げると、エアコンの修理作業を  
していた業者の男達は思わず手を止め、環奈  
達の方に視線を向けた。  
「えっ・・・」  
義父の口から飛び出した思いがけない言葉に  
環奈は一瞬自分の耳を疑った。

「環奈さん、聞こえたでしょ？アナタがそこ  
で悶えていたらお父さんのデッサンがで  
きの。だからオ○ニーして発散しなさい  
って言うてくれてるのよ」  
呆然としている環奈に対して、美奈子  
が畳み掛けるようにテーブルの上でオ○  
ニーするよう命じた。  
「そんな・・・」  
義父と義姉からの恐ろしい命令に、環  
奈は表情を強張らせた。  
こんなリビングのテーブルの上で、し  
かも近くに業者の男達がいる前で全裸  
オ○ニーをするなど到底考えられない  
ことであつた。  
しかし、勇蔵と美奈子の顔を見ると、二  
人が本気で言っているのが分かり、環  
奈は秘部からさらに厭らしい汁を滴ら  
せた。  
「さあ、グズグズしてないで、そこで  
オ○ニーするんだ！」  
勇蔵が声を荒げると、隣に座る美奈子  
は意味深な笑みを浮かべながら、自  
らのスマホに保

存された環奈の恥ずかしい画像を見せたのだ  
った。ああん、やめてえ。・・。環奈は心の  
中で泣き叫んだ。二人の命令に従わなければ  
美奈子は自分の痴態画像をネットで拡散する  
つもりなのだ。自分が美奈子に弱みを握られ  
どんな命令にも逆らうことができないのを改  
めて思い知った環奈は、悔しさのあまり唇を  
噛みしめた。  
「分かりました」  
環奈はか細い声でそう呟くと、ガニ股ポーズ  
を崩し、テーブルの上に座った。そして、美  
奈子からの指示により二人の前で脚を大きく  
開くと、剥き出しの股間に右手を伸ばして秘  
部に指を挿入し、左手は乳房を掴んでゆっく  
り揉み始めたのだった。  
「ああん」  
環奈は思わず喘ぎ声を漏らし、義父や義姉、  
それに業者の男達が見つめる前で禁断のオ  
ニ―に耽った。  
「オオッー」

美女の全裸オニーショーを見た業者の男達  
は驚きの唸り声を上げ、作業の事などすつか  
り忘れ食い入るように入った。  
「ちゃんところちを向くんだ！」  
勇蔵は、テーブルの上で恥ずかしそうに俯き  
ながらオニーする環奈に対し、顔を上げ自  
分の方を見るよう命じた。  
「ああん、はい・・・」  
環奈は小さな声でそう呟くと、ゆつくりと顔  
を上げ、目の前に座る義父の顔を見つめた。  
いやあん、恥ずかしい・・・。勇蔵と至近距  
離で目が合ってしまった環奈は、激しい羞恥  
に喘いだ。  
「そのままこっちを見ながらイクまでオニー  
するんだ」  
勇蔵はそう言うのと、オニーする嫁の姿をス  
ケッチブックに描き始めたのだった。  
いやあん、こんな姿描かないで・・・。自  
分の死ぬほど恥ずかしい痴態を描かれる事  
に環奈はどうしようもない屈辱を覚えた。しか

し、その手を止めるわけにはいかず、環奈は  
デッサンする勇蔵の顔を見つめながら禁断の  
オ○ニーを続けた。  
「環奈さん、もっと大きな声を出してやりな  
さい！」  
勇蔵の隣に座る美奈子が強い口調でそう命じ  
ると、環奈は一瞬美奈子の方を恨めしそうに  
見た後、大きな声で喘ぎ始めたのだった。  
「ああん、ああん」  
リビングに環奈の恥ずかしい声が響き渡ると  
部屋全体が異様な熱気に包まれていった。  
フフツ、人前で本気のオ○ニーをするなん  
て、すっかり体に火が付いてしまったようね  
美奈子は目の前でオ○ニーに興じる義妹の姿  
を見ながら心の中でそう呟くと、満足そうな  
表情を浮かべた。そして、環奈のデッサンを  
する勇蔵は年甲斐もなく股間を痛いくらいに  
膨らませ、胸の奥に湧き上がる欲情をスケツ  
チブックに迸らせていった。環奈が自分の顔  
を見つめながら喘ぐ姿を見ていると、まるで

嫁と疑似セックスをしているような錯覚に陥り、何とも言えない背徳感が老体に計り知れない力を漲らせた。

「あぁん、もうダメえ」

環奈は、勇蔵に向かってそう叫ぶと、下半身を激しく揺らし始めた。

「環奈さん、イク時にはちゃんと大きな声で自分の名前とイク事を叫ぶのよ」

美奈子は、絶頂寸前の環奈に対して屈辱極まりない命令を与えると、もはやトランス状態に陥っている環奈は黙って頷いたのだった。

そうして、環奈はリビングのテーブルの上に座ったままついにその時を迎え、勇蔵の顔を見つめながら断末魔の叫び声を上げた。

「環奈、いつ、イキまゝす！」

次の瞬間、環奈の下半身はテーブルの上で激しく痙攣し、テーブルの脚が軋む音が響いた。

「オオッー」

業者の男達は感嘆の唸り声を上げ、勇蔵はペ  
ンを動かす手を止めると、暫し嫁のイキ果て  
た姿を見入ったのだった。

■ 第二章 庭で嫁のヌード撮影

暫くして快感の余韻から目覚めた環奈は、  
義父と義姉の前でオ○ニーしてイッてしまっ  
た事を思い知り、激しい羞恥に襲われた。  
「環奈さん、アナタって大人しそうなわりに  
イク時は随分と激しいのねへ笑～」  
美奈子がそう言って微笑みかけると、環奈は  
顔を真っ赤に染めて項垂れた。まったく赤の  
他人である業者の男達にイク姿を見られてし  
まった事も勿論恥ずかしかったが、それ以上  
に同じ屋根の下に暮らす義父と義姉にこんな  
に間近でイク姿を見られた事の方が遙かに恥  
ずかしかった。  
「環奈さん、これで少しは発散できたかし  
ら？」  
美奈子がそう問い掛けると、環奈は恥ずかし  
そうに俯いたまま小さな声で「はい」と答え  
た。

「そう、それじゃあもう一度さっきのポーズをやりなさい」

美奈子にそう命じられた環奈は、再びテーブルの上でガニ股ポーズを作り、勇蔵の顔を見つめると引きつった笑みを浮かべた。

環奈の秘部からは厭らしい汁が滴り落ち、清楚な嫁は義父の前で何とも淫らな姿を晒していた。そうして、勇蔵は胸の奥から湧き上がる欲情のままに環奈の痴態をスケッチブックに描き終えると、目の前にいる環奈の姿と描いた絵を何度も見比べて満足そうな表情を浮かべた。

「まあお父さん、とっても良く描けているじゃない。せっかくだから家の中にこの絵を飾ろうよ」

スケッチブックに描かれた環奈のヌードデッサンを見た美奈子は、その上手さに感嘆の声を漏らした。

それから、勇蔵が絵を描き終えたのと同じタイミングで業者の男達もエアコン

の修理を終え、環奈の裸体を名残惜しそうに眺めながら部屋を出て行ったのだった。そして、業者の男達が帰ると美奈子は環奈に近づき、その耳元で何やら囁きかけた。

「いやあん」

美奈子の言葉を聞いた環奈は思わず恥ずかしい声を漏らし、苦悶の表情を浮かべた。

「環奈さん、分かったわね」

環奈に何かを伝えた美奈子は、怯える義妹に向かって凄んだ。それはまるで、自分の言う通りにしなかったらどうなるか分かっているわねと脅しているように見え、環奈は唇を噛みしめながら小さく頷いた。

そうして、環奈はテーブルの上で全裸ガニ股ポーズをしたまま、覚悟を決めたかのように目の前に座る勇蔵に向かって震える声で告げたのだった。

「お父さん、今度は庭に出て・・・私のヌード写真を撮っていただけませんか？」

環奈はそう告げ終わると、恥ずかしそうにガ  
ックリと項垂れた。嫁の口から飛び出した思  
いがけないお願いを聞いた勇蔵は、それが美  
奈子がさつき耳元で囁いて無理矢理言わせた  
セリフである事をすぐに分かった。  
そして、勇蔵は自らの欲情を何処までも満  
たそうとしてくれる親孝行な娘に心から感謝  
した。勇蔵の趣味は絵を描くことだけでなく  
写真撮ることもあり、美奈子はそれを知つ  
た上で環奈に言わせたのだった。  
「まったく懲りない嫁だな。分かったよ、庭  
に出て写真を撮ればいいんだな」  
勇蔵は胸の奥の興奮を悟られぬよう面倒臭そ  
うに言い放った。  
「あ、ありがとうございます。・・」  
環奈は本当は有難くも何ともなかったが、美  
奈子の手前そう御礼を言うしかなかった。  
そうして、環奈はようやくテーブルから降  
りると素っ裸のまま家の外の庭へ出ることに  
なった。家の隣には二階建てのアパートが建

つており、アパートの二階の住人に見られてしまわないかと環奈は気が気でなかった。「環奈さん、アナタって根っからの露出狂なのねえ」素っ裸で庭に出た環奈に対して、美奈子は呆れたように呟いた。そんな・・・悔しい。環奈は、美奈子の命令で仕方なく素っ裸のまま庭に出ることになったにも関わらず、自分を露出狂呼ばわりすることが許せなかった。環奈が自分の部屋からカメラを持って現れた勇蔵は胸の奥に湧き上がる欲情を隠そうと必死に平生を装っていたが、その目はギラギラと輝き、美しい嫁に今度はどんな破廉恥なポーズをさせようかと企んでいるのが伝わってきた。「それじゃあ、今から私の言う通りのポーズをするんだ」カメラを環奈に向けて構えた勇蔵はそう言つて、早速最初のポーズを告げた。

「まずはさつきと同じガニ股になって、両手を頭の後ろで組みなさい」

勇蔵がそう指示を出すと環奈は羞恥に体を震わせながら庭の真ん中で大きく脚を開いてガニ股になり、そのまま両手を頭の後ろで組んで見せた。破廉恥極まりないポーズはさつきとまったく同じだったが、屋外でするそのポーズは環奈をより惨めな思いにさせた。もしも今、隣のアパートの住人がこちらを見ていたらと思うと、環奈はまったく生きた心地がせず、一刻も早くこの時間が終わることを願った。

「そんな怖い顔していないで、ちゃんと笑うんだ」

勇蔵は、羞恥に怯える環奈を精神的にいたぶるかのようになり、またも屈辱のポーズをしたまま笑顔を見せるよう求めた。

「は、はい」

環奈は震える声でそう答えると、羞恥を堪えにくりと口角を上げていった。ああん、こ

んなの恥ずかしすぎる・・・。極限の羞恥の  
中で笑わなければいけない事は、環奈の精神  
を錯乱させた。  
そうして、環奈がどうにか引きつった笑み  
を浮かべると、勇蔵は満足そうな表情でシャ  
ッターを切っていていた。  
「もつと心から笑うんだ！」  
加虐心を煽られた勇蔵はシャッターを切りな  
がら環奈をさらに精神的に追い詰め、哀れな  
嫁は死ぬ思いで笑顔のグレートドを上げていく  
のだった。  
「環奈さん、アナタが庭でヌードを撮影して  
欲しいってお願いしたんだから、もつとお父  
さんの言うとおりに笑いなさいよ！」  
傍で様子を見守る美奈子は、屈辱に喘ぎなが  
ら必死に笑顔を作ろうとする環奈の姿を面白  
そうに眺め、勇蔵と共に環奈を精神的に追い  
詰めていった。

あぁん、こんなあんなまりだわ・・・。環  
奈は心の中で泣き叫びながら、顔では満面の  
笑みを浮かべていた。  
「アハハッ、その笑顔最高！やればできるじ  
やない（笑）」  
環奈の笑顔を見た美奈子は手を叩いて爆笑し  
環奈を褒め讃えた。  
清楚な嫁が家の庭で全裸ガニ股ポーズをし  
ながら満面の笑みを浮かべるその姿は、どう  
見てもただのド変態にしか見えなかった。勇  
蔵は今まで妄想の世界の中で思い描いてきた  
どんな姿よりも刺激的で卑猥な嫁の姿に興奮  
し、懸命にシャッターを切り続けた。あぁん  
そんな撮らないで・・・。環奈は自分の死  
ぬほど恥ずかしい姿を何枚も写真に撮られて  
いるのかと思うと、どうしようもなくやるせ  
ない気持ちになった。それらの写真は義父の  
一生の宝物になるだけでなく、これから自分  
を脅すための強力な武器になるのは間違いな  
かった。

私、これからこの家でどうやって生きてい  
けばいいの・・・。。義父と義姉の二人に自ら  
のあまりに恥ずかしい弱みを握られてしまっ  
た環奈は、絶望的な気持ちで笑顔を浮かべ続  
けた。  
「それじゃあ次は、その物干し竿の傍に立  
つんだ」  
環奈の全裸ガニ股ポーズを一通り撮り終えた  
勇蔵はそう声を掛けると、ようやく屈辱のポ  
ーズを許された環奈は激しい羞恥にフラフラ  
になりながら、洗濯物が干されている物干し  
竿の傍に立った。  
すると、勇蔵は美奈子に小声で何やら話し  
かけ、それを聞いた美奈子は意味深な笑みを  
浮かべると、慌てて部屋の中に入っていった  
のだった。一体どうしたっていうの・・・も  
しかして、ここで私に何かHなことをするつ  
もりなの・・・？環奈は、勇蔵が美奈子に何  
を指示したのか気になつて仕方なかった。  
「お父さん、これでいいかしら」

程なくして、庭に戻ってきた美奈子が手に持  
った細いロープを勇蔵に見せると、勇蔵は満  
足そうな表情でそれを受け取り、環奈の方  
近づいた。  
「両手を出すんだ」  
勇蔵が強い口調で命じると、環奈は訳も分  
らぬまま両手を差し出した。すると、勇蔵は  
環奈の両手首をロープで瞬く間に縛り上げ、  
さらにそれを物干し竿に縛り付けたのだっ  
た。  
「いやあっ」  
全裸のまま庭の物干し竿に縛られてしまっ  
た環奈は悲鳴を上げ、必死に身を振ってロ  
ープを解こうとしたが、きつく縛られたそ  
れはど  
うにもならなかった。  
「じつとするんだ！」  
勇蔵は暴れる環奈を一喝すると、全裸で物  
干し竿に縛られた哀れな嫁を撮影し始め  
たのだ  
った。

■ 海老沢薫 B L O G

<https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/>

・ ・ ・ 「羞恥」「露出」「辱め」をテーマとした小説シリーズや、各種コンテンツ情報などを配信。

■ そのほか SNS

[https://x.com/ebisawa\\_K](https://x.com/ebisawa_K)

[https://www.instagram.com/kaoru\\_ebisawa/](https://www.instagram.com/kaoru_ebisawa/)

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『 清楚な美人妻 彩 27 歳 絵画モデル編 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281>

『 清纯派女優 結衣 24 歳 ー 国民のペットへと堕ちていくヒロイン ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802>

『 清纯派女優 結衣 24 歳 ー 女神の憂鬱 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675>

『 女教師 玲奈 25 歳 ー 女性教諭の前代未聞の不祥事 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186>

『 美人社長 里帆 26 歳 ー 若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885>